

「引き出し」としての「くろぐつな」①

おやさと研究所教授
佐藤 孝則 Takanori Sato

『天理教教典』「第三章 元の理」には、月日親神は、「西の方からくろぐつなを、……引き寄せ、これにも又、承知をさせて貰い受け、食べてその心味を試された。そして……引き出し」の道具と定められた、とある。

そこで、「引き出し」の道具として定められたくろぐつな、すなわち「黒蛇」について述べる前に、ヘビに関する一般論について紹介する。

「夜刀神」というヘビ

奈良時代の713年に編纂され、721年に成立した地誌、『常陸国風土記』に以下の文章がある。麻多智という人物が谷のアシ(葦)原を開いて水田をつくろうとしたときの話である。

此の時、夜刀の神、相群れ引率て、悉尽に到来たり、左右に防障へて、耕佃らしむることなし。……是に、麻多智、大きに怒の情を起こし、……夜刀の神に告げていひしく、「此より上は神の地と為すことを聴さむ。此より下は人の田と作すべし。今より後、吾、神の祝と為りて、永代に敬ひ祭らむ。」といひて、社を設けて、初めて祭りき、といへり。水田をつくろうとすると、夜刀神が現れて妨害を始めた。そこで麻多智はたいへん怒り、夜刀神に「この場所から上は夜刀神の地域として、この場所から下は人間の水田とする。これからは私が神主となって夜刀神を永久に祀ります」と言ったとある。

夜刀神は角を持った想像上の蛇と一般には考えられている。人間は夜刀神がすむ湿地域を水田につくりかえようと、夜刀神と対立し衝突するが、結果的に人間はこの夜刀神を山側に追いやり、その代償として社を建て、そこで夜刀神を永久に祀ることを約束したわけである。人間は夜刀神と衝突し、別の場所へ追いやることはするが、両者間には決して勝敗や優劣の関係をつくらず、むしろ相互に思いやる関係がその根底に潜んでいる。そして、神界と人間界とを区分けするために鳥居を設置し、神への畏敬をこめて永久に祭りを執り行うことを約束している。

一見すると夜刀神を山側へ追いやった人間(麻多智)に衝突のさいの勝利があるように思われるが、実はそうではなくむしろ逆で、水田を作らせていただく代償として永久に祀ることを約束したのではないだろうか。つまり、永久に祀ることを条件に、人間は当該地を生業の場所として借用する“権利”の証を、夜刀神からうまく引き出したのである。

さて、夜刀神として祀られた蛇とは具体的にどのようなヘビを指しているのか。上述した『常陸国風土記』の内容から推理してみよう。

「夜刀」はニホンマムシのこと？

常陸国は現在の茨城県のあたりをさしている。現植生から当時の植生環境を類推すると、この地域の谷あいにはアシが広範に生育する湿地環境で、周辺の山麓にはコナラ、クヌギ、スダジイなどの広葉樹が広がっていたと考えられる。このような自然環境であれば、今日の水田稲作で最も広く栽培されている温帯型ジャポニカ米(ササニシキやコシヒカリなど)を湿地域で栽培・普及させたりすることも、まったく問題はなかったはずで

ある。ただそこには、水田環境を好むヘビがたくさん生息し、なかには咬まれると死に至るニホンマムシ(写真1)も分布していたはずである。



写真1 ニホンマムシ。

大和盆地の「山の辺の道」沿いに夜都伎神社(写真2)がある。この“夜都”は「やと」「やつ」ともいい、「谷戸」や「谷地」を意味している。この神社は、もともと現在の場所よりも少し山側に鎮座していたという。谷あいに近く、沢水が山から流れ、日当たりも良い湿地環境にあったという。またこのような湿地域は水田に適した場所であり、さまざまなヘビが棲むところでもある。

ヘビのうち最も恐れられる対象は、本州では昔も今もニホンマムシで、全長50～60cmほどで体はずんぐりし、日本刀の刃渡りとほぼ同じ長さである。夏季は強烈な日差しを避けるため夜間に活動し、夜、田んぼの畦道を歩くとそこにはニホンマムシが横たわり、知らずに踏みつけることがある。咬まれると瞬時に痛みを感じ、その咬傷部からは血が滲み出ている。まさに“夜刀”で切られたような状態で、患部に入った毒量が多いときは重症を負うことがある。



写真2 夜都伎神社(天理市乙木町)。写真1のマムシは、この神社の南、数100mに位置する住宅地の石垣の下で写したものだ。

すなわち、名前の由来から考えると、夜都伎神社は「夜刀」伎神社であり、御神体は“マムシ神”ではないかと考えている。

本州には毒をもつヘビとしてヤマカガシも分布するが、日本刀のように体はずんぐりしておらず、全長はもっと細長いことから、「夜刀」と呼ぶには相応しくない。また、黒蛇(通称カラスヘビ、あるいは黒グツナ)に咬まれると命はないという噂が流布しているが、それは迷信である。黒蛇のほとんどは無毒のシマヘビの黒化型で、ごく稀にヤマカガシの黒化型を見かけることがある。ちなみに、筆者が奈良県内に分布する黒蛇を調べた限りでは、ヤマカガシの1個体を除くほとんどがシマヘビの黒化型だった。